

特集にあたって

森村 英典

ORはどうもパツとしない。QCとはほぼ時を同じくしてわが国に導入され、研究も進められているのに、世間ではQCを知っている人は多くともORを知る人は少ない。というようなボヤキは、長年にわたってわれわれ自身が折に触れてしてきたような気がする。実務に本当に役立つORが研究されているのか、という指摘もたびたび行なわれ、それが学会の長期計画のキーワードとして「実学への回帰」という語を生んだのであろう。

そういう状況をふまえて、「OR広報研究部会」が発足したのであるが、またたく間に3年が経ってしまった。はじめの問題意識では、ORが世間に知られていない状況を打破するためには、どんなPRをすればよいか、その方策を研究しよう、ということであったと思う。しかし、PRの実務に強くない人間が集まったの研究部会であったためか、世間にアピールするにもその材料を整えておく必要がある、という話から、話題は自然に「ORの普及のために、何が必要か」というかなり基本的なテーマに偏っていった。いわば「OR普及のための鍵は何か」についての議論であったといえよう。

その中で、たとえば「ORストーリー」というフレームワークを考え、そのフレームワークを意識しながらORの作業を実施してゆくのがよいのではないか、OR教育を進めるにはどんなテキストでどんな教材を準備するのがよいか、世間にアピールする事例にはどんなものがあるか、そもそもORが普及している企業にはどんな特徴があるのか、というように、さまざまな話題が出され話し合われた。その様子的一端は学会の研究発表会の席上で発表したり、特別のセッションを再度にわたって用意したり、また討議内容の概要を小冊子に編集して学会発表会の席上などで配布するなど、「広報部会の広報」にはそれなりに務めてきたつもりではある。

本号にはこの広報研究部会での議論を基礎とした5編のリポートを集め、「OR普及へのカギ」と題した特集を試みた。いずれも上記の話題に沿った報告であるが、結局のところ「ORとは何か」を問いかけるものとも見られよう。広報活動の基本は世間と自己とのかかわり合い

を確立してゆく過程にあり、社会的な存在基盤の安定と拡大を図りながら、目標の実現に向けて自己の社会的影響力を行使することを可能とすることにあるとすれば、これも1つの方向とご理解いただければ。

「OR実施の諸側面」は、ORの利用の側面からのOR作業のタイプの分類、OR問題の経営的レベルとツールの対応、OR担当組織のタイプの分類等を試みながらその特徴について考察を加え、これからのORの役割と期待について言及したもので、企業においてORを実践してきた著者の経験が基礎になっている。

「ORこれからの分野」では、世の中の変遷に伴ってOR適用の分野もさらに拡大を続けてゆくことが予想されているので、従来からのわが国で実施されてきたOR適用事例を米国の最近の傾向と比較することなどをベースとして、今後期待される分野を探ろうとしている。

「企業におけるOR担当組織とその維持」は、はっきりとしたOR担当組織をもっている企業へのヒヤリングを通して、現状の一端を要約して読者に提供するとともに、その役割や組織維持の努力の大切さを訴えるもので、今年秋の研究発表会における企業人セッションの討議の基礎ともなった。

「End User ORの提案」は、上記ORストーリーの提案でもあるが、それも1つのツールとしてORのツールを整備し、ORリテラシーを高める努力と相俟って、いわばエンドユーザーが自前で気楽にOR作業を進める習慣がつくようにすることがORが真に役立つ場を増やすことになる、との認識から、そのような環境づくりを訴えるものである。

「ORリテラシー拡充のために」は、ORの発展のためにはORの普及が大切で、それにはORリテラシーとでも呼ぶべき基本的な知識の普及が必要であろう。その意味から、ここでは、その普及をめざした教育カリキュラムと教材の一例についての例示を行なっている。

ORの普及をめざして、さまざまな考えや議論があり、いろいろな場でそれらの着想が試行されることが望ましい。この特集がそのきっかけになれば幸いである。